

# イチゴ (バラ科)

毎年苗作りをして植えかえる。根の張りが浅いので、乾燥や肥料やけに気をつける。

作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普通 (露地)							△ ※1		△ ※2		◎ 定植		
						収穫							

※1 . 親株の移植  
※2 . 子苗の仮植

## 1) 適地

県内どの地域でも栽培できますが、保水力が大きく通気性のよい粘質土が適します。排水にさえ注意すれば、畑より水田の方が活着後の生育がよく、たくさんとれます。

## 2) 品種

「宝交早生」が適しています。「とよのか」や「女峰」、「章姫」などのハウス用品種は露地栽培には適しません。

## 3) 作り方

### ① 苗の育て方

【親苗の管理】初めて栽培する場合は、購入苗を10月末に定植しますが、2年目以降は、収穫後の株をそのまま残すか、別の場所に移植して親株とします。

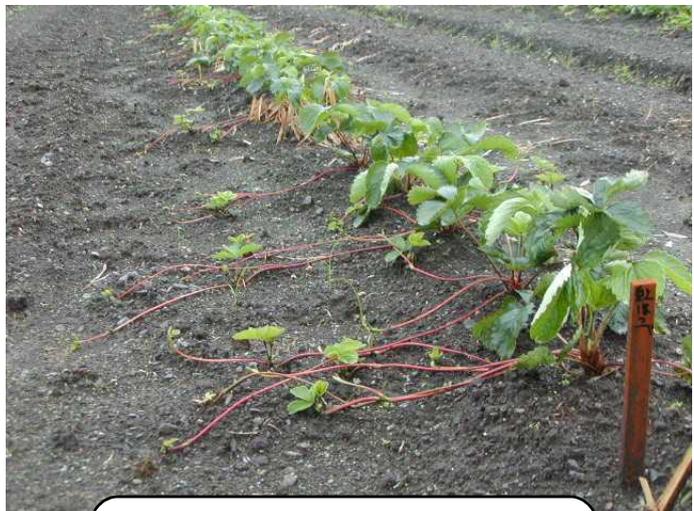
そのまま親株として残す場合は、6月上旬～中旬頃に1㎡当たり1株になるように、間引きます。間引き後の6月と7月に1㎡当たり高度化成肥料20gを追肥します。

別の場所に移植する場合は、移植の1か月前に1㎡当たり堆肥2kg、苦土石灰100gを施用して耕し、1週間前に高度化成肥料50gを全体に施して畝を立てます。移植の際には、それまでに出ているランナーをあらかじめ取り除きます。根の周囲に土が多く残るように掘り上げて移植し、十分に灌水します。

7月頃までに親苗から発生したランナーは全て取り除き、その後に発生するランナーを本圃用の苗として残します。ランナーが伸びてくる部分の土をあらかじめ耕耘しておくことで除草ができるほか、採苗作業も容易になります。

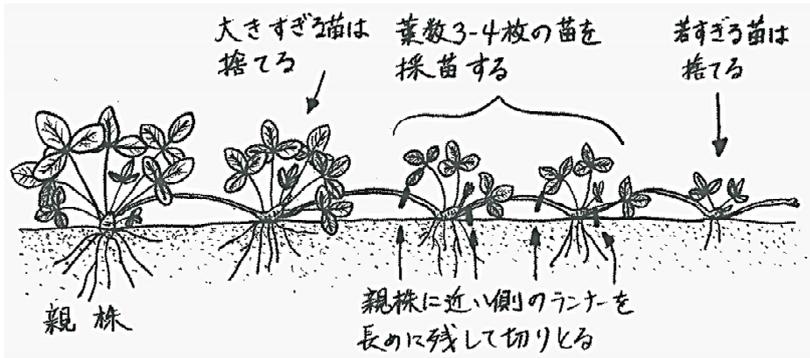
ランナーが伸び、子苗が発生したら、混み合わないよう適切に配置するとともに、雑草を取り除きます。また、乾燥するようなら、欠かさず水をやります。親株1株からは通常20～30株程度の苗が採取できます。

【苗の採苗と仮植】8月下旬～9月上旬に親株から発生した苗のうち、本



育苗床で親株から発生したランナー

葉3～4枚で根のよく出たものを採苗します。親株に一番近い老化した苗や、ランナーの最も先端の若すぎる苗は除外し、中央部の苗だけを採苗します。仮植床の基肥は、親株を移植する場合の施肥量と同程度とします。イチゴ



は、親株の反対側にクラウン（茎）が傾き、その方向に花房が出る習性があります。そこで、採苗の際、親株に近い方のランナーを3cm程度残しておく、定植の際に植える方向の目印になります。採苗後は、根を乾かさないようにできるだけ早く仮植します。芽の部分が埋もれないように浅植えとし、仮植は15cm角に1株の割合とします。作業は日中を避けて行い、植え終わったら十分灌水します。

【仮植苗の管理】 活着するまでの1週間ほどは毎日灌水し、日中はよしずや寒冷紗で遮光します。活着後は発生するランナーやわき芽、老化した葉を掻き取るとともに除草します。追肥は定植までに1～2回、高度化成肥料で1m<sup>2</sup>当たり10～20g施します。

## ②本圃での作り方

【圃場の準備】 4～5年イチゴを栽培していない畑を選びます。定植の1か月前に1m<sup>2</sup>当たり堆肥2～3kg、苦土石灰100g、BMようりん50gを施します。定植の1週間前に緩効性肥料80gまたは油粕200gを施し、幅120cmの畝を立てます。

【定植】 10月下旬～11月上旬に株間30cmで2条植えします。仮植と同様できるだけ浅植えにします。通路側に花房を揃って出させるために、採苗の時目印に残したランナーを畝の内側に向くよう定植し、十分灌水します。

【追肥・中耕】 追肥は2月に、1m<sup>2</sup>当たり高度化成肥料なら20～30g、油粕なら80g、または両者の半量ずつを混合して施用します。追肥後は畝の表面を軽く中耕します。

【マルチング】 果実の汚れ防止や、地温上昇、雑草防除などのため、3月上旬に黒マルチを張ります。まず畝全体をフィルムでおおって周囲を固定します。フィルムの上から軽く押さえるとイチゴの株の位置がわかるので、手で破ってフィルムの外に引き出します。

【灌水】 4～5月に晴天が続いて畝が乾燥したら灌水します。

【防鳥対策】 果実が色着いてくるとヒヨドリなどに食害されるので防鳥ネットを張ります。

【収穫】 全体が着色したら朝夕の涼しい時に収穫します。

## 4) 病虫害防除

ウイルス病や萎黄病の予防のため、毎年秋に、2～3株新しい苗を購入して親株の更新を図ります。アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ類が発生しやすいので、早めに防除しましょう。